

自己の欲望をじつと見つめる自己こそが自己と悟れ

染谷 臣道

巨大な文化（文明）に圧倒される近代人

人間が動物であることに間違いはない。だが、動物と異なる点の一つある。それは文化をもつという点である。もつとも、最近の霊長類学の発達で文化をもつ動物は他にもいることが判つてきたから人間だけが文化をもつという言い方はもう古い。とはいへ、例えばボノボが子供の気持ちになつて遊び相手になるなどという高度な精神文化をもっているといつても人間の文化にはかなわない。このことも強調しておかなければならない。

人間は自らが生き延びるために文化を作つた。文化は人間の、人間による、人間のための装置であり、道具である。人類は七〇〇万年という長い時間を掛けてこつこつと文化を作り上げてき

た。蓄積を重ねて人類はついに新たな高度な文化すなわち文明を作るに至つた。

しかしその文明が今や造り主であつた人間を痛めつけるという逆転現象が起こつている。原発にせよ、火力発電にせよ、内燃機関にせよ、それらがもたらす重荷がそのよい例である。チェルノブイリや福島の人たちは大きな災害に苦しんでいる。

もちろん被害はこうした技術文化の分野に限らない。民主主義は長い政治制度の歴史が生んだ最高の制度といわれているが、それとても現実に運用されている間接民主制（代表民主制）は必ずしも民意を反映していないという欠陥をもつ。資本主義という経済制度にしても今やますます格差の拡大を生んでいるという欠陥

をもつ。地域社会や家族という社会制度もまた崩壊している。

宗教もまた人間が作った文化に過ぎない

さらに加えていうならば、宗教もまた人間自身が作った文化の一部であるということを描きおこななければならない。このところ、過激な「イスラム国」(実は「イスラーム」の名を借りた、実体は遺恨で凝り固まった反欧米集団だと思われる)がフランスでテロ事件を起こしたかと思うと、欧米のようにイスラームと歴史的確執のない、従って遺恨のない日本人間まで殺した。イスラームは、ユダヤ教やキリスト教と同じく、自らが信仰する宗教のために命を捧げるならば、それは殉教であり、彼／彼女は天国に行けるといふ。しかし冷静に考えてみれば判るように、天国なるものが本当にあるのだろうか？ 同じように地獄なるものがあるのだろうか？ それは一つの考え方つまり一つの文化に過ぎないかと判る。同時に、天国も地獄もないという考え方も一つの考え方、文化であることが判る。実は、どちらも肯定できないし、否定もできない。信仰の軛から離れて冷静に考えれば、私たちはデイルンマにぶつかるといふ。それゆえ天国に行けると信じて人を殺すことも疑問符を付けなければならないはずである。天国に行けるのだから人(異教徒)を殺してもよいなどというのは独りよがり

過ぎない。そうした独りよがりを生むのも文化なのだ。

神もまた人間が作った創造物に過ぎない。しかしユダヤ教、キリスト教、イスラームは神が人間を創ったという。神話も文化の一部なのだから神が人間を作ったという論理は明らかに逆転した考え方であるが、それが正当化されると異教徒を殺すべしという恐ろしい結果をもたらす。カトリックが日本に伝わったとき有馬晴信、大村純忠、大友宗麟といった九州のキリシタン大名はザビエルら宣教師の説くところを忠実に実行した。彼らは自領の神官、僧侶として信者たちをたくさん殺したのである(吉水)。自領の民を殺すなど狂気の沙汰以外の何ものでもない。しかし今「イスラム国」も同じことをやっている。四〇〇年前と同じ論理で同じことが繰り返されているのである。それも文化の仕業であると考えれば、人間という動物は自縄自縛、自業自得、自らを滅ぼす妙な論理をもった動物、愚かな動物、そういう宿命をもった、決して他の動物には見られない、そして決してほめられるはずのない、独自性を持った動物ということになる。人類は早くこの愚かさ気づかなければならない。それは、原理的に可能である。宗教もまた文化の一つであるならば、人間自身が変わることができはずである。あくまでも文化は人間が作ったものなのだから。もつとも、宗教は人間の心に深く染み込む文化なのだから簡単に

変えることが難しいことも確かでその点、厄介だ。

人間に災いをもたらす文明のアイロニー

私は文明を「文化・政治・経済・社会の複合体」と考えているが、現代文明は文化も政治も経済も社会も、一方で人類に多くの恵みをもたらしたものの、他方で災いももたらしている。果たして人類は山積する問題を処理できるのだろうか。

文明が高度化するにつれて人類は混乱の渦に投げ込まれた。現代文明は多様化しているのだから当然である。現代文明はあまりにも複雑であり、どう生きたらよいのか、人を迷わせる。ここで大事なことはまず自己自身が何を欲し、何を欲していないか、を見つめることではなからうか。次から次へと現出するモノに目がくらみ、次から次へと出てくる新しい情報に振り回され自分が見えなくなっている現代人。まず冷静に自己をみつめることが必要だろう。

さらに問題なのは、今日の文明が先進国そして近年では新興国を過剰な生産と過剰な消費へと誘導していることである。それは地球の資源をその能力の限界まで使い果たそうとし、人類の生存を危うくしている。そうした事態に対していくつもの警告が出されて久しい。しかし「成長」の名の下、欲望の膨張は国際間であ

れ、個人間であれ、推進され続けている。他国に負けないこと、他社に負けないこと、他人に負けないこと、現代社会はまさに競い合う闘争の場となった。国家は生存競争に勝ち残るために、企業も個人も生き残るために、好むと好まざるとにかかわらず、そういう場に自らを投入しなければならぬ。苛酷である。それが「自然のならい」（「心学」の用語）なのだろうか。その苛酷さに耐えきれず、挫折し落後する国家、倒産の憂き目に遭う企業、自らの命を投げ捨てる人が出るのも「自然のならい」なのだろうか。

今や、世界が人間本来の生き方つまりすべての人々が共存共栄を享受する、言い換えればすべての人々が幸福になることを理念とするようになった。この理念に少しでも近づけられるようにするにはどうしたらよいのか。そのためには、なぜこのような状況が生まれたのか、そういう状況を創っているのは何か、なぜこうした苛酷な状況を生きななければならないのか、しっかりと冷静に考える時期に来ているのではないかと思う。自らを見失っているこの状況を見つめることが大事だろう。ジャワ心学はその一助になるかと思われる。

本稿の目的

本稿は、二〇世紀初頭にジャワで生まれた「心学」（ジャワ心学）が説くところを批判的に検討し、私たちに有効なところを引き出そうという試みである。この思想が教えようとしたのは何か、その教えに欠けるものがなかったか、欠けるとすればそれは何か、なぜか、を論じる。近代化の名の下でモノは豊富になったものの、神が不在となつてしまい、心に空白ができてしまった近代国家と、逆に神が満ち溢れているものの、モノが欠乏する国、それぞれが問題を解決する手掛かりを示したい。

ジヨグジャカルタ^①—インドネシアののどかな町

私は文化人類学を専攻した。この学は長期のフィールドワークを課している。私はインドネシアに決めた。この国を訪れたのは一九七二年だった。もう四〇年以上も前になる。行った先は中部ジャワの古都ジヨグジャカルタだった。当時、日本は高度成長の真っ只中にあり、すでに慌ただしさが顔をのぞかせていた時代だった。それに比べると、この町は穏やかな空気が至るところに漂っていた。そのゆっくりと流れる空気が私を惹きつけてしまったようだ。同時代にありながらも何と違うだろうか。当時のジヨグジャカルタには信号が一つしかなかった。数え切れないほど

ある現在とは大違いである。それほどに走る車が少なかったのだ。町を走っているのはベチャ（人力車）と牛車と馬車と自転車。音を立てて走る「自動車」といえばイタリア製のスクーターと日本製のバイク、そして一九五〇年代の今にも故障しそうな車だけだった。歩く人々もゆっくりだった。一年中を通して夏の国だから当然である。熱帯では早歩きは禁物なのだ。

冗談を交わしながらおしゃべりに興じている人々がまたのどかさを増していた。日本ではもうそういう風景は見られなくなっていたから私には驚きだった。おしゃべり好きのインドネシア人と、押し黙ったまま足早に歩く日本人。どちらが幸せなのだろうかと考えたものだった。

そんな文化に触れさせ、今の日本を考えてみよう、私が所属していた大学の学生を連れて行き、およそ日本とは違った文化を垣間見させようとフィールドワークを実践させ、英文の報告書を書かせた（Someya ed. 2004, 2005, 2007^②）。英文で書かせたのは調査結果を調査者側にのみではなく、調査対象となった現地側の人々にも開示し、読んでもらい、批判を受けたいと思ったからである。これは成功した。世話になったホームステイ先の家族とその後もずっと交際を続けている学生もたくさん出たのである。案の定、彼ら／彼女らはジヨグジャカルタの人々に親しみを感じた

ようだ。日本は豊かである。インドネシアは貧しい。しかしインドネシア人のほうが幸せそうだと学生たちは口々に語っていた。なぜ幸せそうに見えるのだろうか？ 文化の違いが見えてくる。さらに深めて行くと、宗教が豊かな国とモノが豊かな国の違い。それぞれの幸せと同時に、不幸も見えてきた。神にすべてを任せるジャワ人と自立を主義とする日本人の違いも見えてきた。

ジャワ心学

インドネシアは新興国の一つとして最近目覚ましい経済発展を遂げ、富裕な人が増えているが、つい最近までは貧しかった。それは収奪に収奪を重ねてきたオランダの植民地支配が長く続いた結果であった。私が最初に訪れた七〇年代の初めでもその後遺症が残っていた。植民地支配という非人道的政治体制は非常に罪深い。そこからまだ抜け出せない被植民地国の惨状を見れば、宗主国オランダはその罪を償いきれるものではない、と私は思う。

その後遺症というのは、例えばジャワ人を含むインドネシア人の教育不足である。それも単に読み書きだけではない。さまざまなモノ作りの技術、ガバナンスの技術、経済運営の技術など多分野にわたっている。私は、現地の人たちにしばしば訊かれた。「日本は大戦争に敗れて焼け野原になった。それはインドネシア

と変わらない。しかし今や先進国になった。しかしインドネシアはまだ途上国のままだ。なぜなのか？」と。そういう質問に私は答えに窮した。なぜならば、その違いは大航海時代以来の近世史の違いに触れなければならず、それを語ればインドネシアの人たちを絶望させるかもしれないと思うからだ。つまり一方で一七世紀の初頭からの二六〇年間、日本人はモノ作りの技術を磨く機会を与えられたし、一九世紀の後半からは欧米の文明を盛んに取り入れ、ますます磨きを掛けることができた。他方、インドネシア人は三五〇年間という途方もない時間を植民地化されたために、自らの技術を磨くことができなかつたのである。三五〇年ともなればその文化は固定化する。今のインドネシア人を知れば、それがよく判る。彼らは決して自らの悲惨な歴史を語ろうとしない。屈辱に満ちているからであり、自尊心を傷つけられるからである。もつとも、そうした苦難があつたからこそ独立のありがたさを心から感じ取れる。そうしたありがたさを日本人は判らないのではないかと思う。

一九二八年、ジャワ心学 (Kawruh Jiwā, ジャワ語) なる思想が生まれた。創始者はキ・アグン・スリヨムンタラム (一八九二〜一九六二) (以下キ・アグンと略称) というジョグジャカルタの王家の王子だった。彼は時の権力者オランダ植民地政府に敢然

と立ち向かった人物である。そういう人物は一八三〇年以来、出なかつた。一九二八年から遡ること一〇〇年前、ジャワで反植民地闘争があつた。ジャワ戦争である。ジョグジャカルタの王家の王子だつたデイポヌゴロが総大将となつてオランダ軍と戦つたのである。五年に及んだ戦争だつたが、最後にオランダの姦計に嵌り、デイポヌゴロは捕えられ、ジャワ人は敗戦の憂き目を見た。その後、オランダ軍に戦いを挑むジャワ人は出なかつた。なぜならジャワ戦争の後に始まつた悪名高い「強制栽培制度」が続いたからである。この制度は「伝統的支配層を使って、村落ごとに農民の土地と労働力を提供させ、ヨーロッパで利益をあげられる作物を栽培、製品化する制度」(森：九二)であつた。ヨーロッパで高く売れたものとは砂糖やコーヒ、藍などでオランダはこれで莫大な利益を上げた。オランダの当時の国家予算の半分がインドネシアからの収益だつたと言われている(佐藤：四九四)。東インド会社は一七九九年に解散するが、その後はオランダ王国が直接インドネシアを支配し、収奪はさらに激しくなつた。

収奪があまりにも過酷だつたためにジャワの人たちにはオランダに対して反抗する力を失つていた。そうした中で、皮肉にもオランダ側から援軍が出た。『マックス・ハーフェラー』である。この本を書いたのはムルタトゥーリといい、本名はダウエス・デ

ツケルというオランダの植民地行政官だつた。彼は自身の経験から植民地行政がどれほど過酷であるかをよく知つていたから現地の実情を踏まえてこの本を書いたのである。この本は一八六〇年に出版された。彼は、この本の最後で、当時のオランダ国王ウイレム三世に向かつて「盗つ人国家」と呼んで自国の悪行を暴き、「三千万を越すあなたの臣民があなたの名において虐待され、搾取されている」と言つて糾弾している(ムルタトゥーリ：四八八～四八九)。

ジャワの人たちはオランダの収奪に加えて日本の収奪も経験したことを語る。日本軍の収奪はオランダ時代以上だつたと、何度も聞かされた。一九四二年三月一日、日本軍はジャワに上陸し、オランダ軍を駆逐した。そして一九四五年八月一五日の敗戦までの三年半、インドネシアを植民地化したのである。食料品から金属までことごとく奪い取られた。また少年たちは強制労働を強いられ、遠くマレーシアやタイに送り出されたという。ちなみに、私も制作に関わつた映像で語りの一部を公開した。一九九七年三月一日にNHKBSで放映された「わが心の旅 ブンガワン・ソロ」である。私はマレーシアのコタキナバルに送られたジャワ人「ロームシャ」の生涯も記述している(染谷一九九五b、Y. Someya 2002)。この事実を日本人はあまり知らないが、インドネシアの

人たちは小学生でも知っている。教科書に書いてあるからだ。こうした歴史的事実を知らないままにいる日本という国そして日本人は恥を知るべきだと思う。歴史的事実は事実として真摯に直視し、決してそれから目を背けてはならない。

『マックス・ハーフェラール』の影響は甚大だった。オランダの植民地行政は様変わりした。植民地の人々の生活、福祉、教育の向上を目指す「倫理政策」を執ったのである。もともと、それはまだ十分とはいえず、二〇世紀に入ってもまだ収奪は続いていた。

キ・アグンが幸福論を世に問うた一九二八年は「青年の誓い」が出された年でもあった。独立への気運の結晶である「青年の誓い」と同じ時期に心学が生まれたのは無関係ではない。

日本が日露戦争で勝利したことはアジアの人々とくに青年たちに大きな影響を与えた。この戦争の勝利（事実上は休戦だったのだが）が「背の低い日本人でも背の高い西洋人に勝てたのだから、インドネシア人だってオランダ人を倒すことができるはずだ」とインドネシア人を勇気づけたのである。「背が高い」とか「背が低い」というのは単に身体的特徴をいっているのではない。民族の力をも意味していたのである。この年、インドネシアの各地からジャカルタに集まった青年たちが会議を開き、そこで「青年の

誓い」が高らかに読み上げられた。「青年の誓い」とは、「私たちインドネシアの青年男女はただ一つの祖国、インドネシアを祖国と承認します。私たちインドネシアの青年男女はただ一つの民族、インドネシア民族を承認します。私たちインドネシアの青年男女はただ一つの言語、インドネシア語を承認します」という誓いである。これは近代国家の樹立を宣言したものに他ならない。インドネシアの独立宣言が読み上げられたのは一九四五年八月七日で、それまでにはまだ二〇年近くの歳月が必要だったが、それでも、近代国家の三要素のうちの二つ、つまり領土と国民が確認されたのである。もちろん統治者であるオランダ植民地政府が認めただけではない。それゆえ三要素の一つである主権が謳われることはなかった。こうして高まった独立への気運は、しかしながら世界情勢の変化に伴い、真の独立までには二〇年ほど待たなければならなかった。

「ジャワ心学」はそういう時代に生まれた。その概要は『比較文明研究』第一三号で紹介した通りである。この思想の中心は、人間とは欲望とそれをじっと見つめる自己から成るが、その欲望をただ見つめるだけの自己（ジャワ語で *aku*）を発見し、それが自己なのだと思え、というところにある。自己は自己のカウンターパートである欲望をただ見つめるだけで、命令を下すこと



図1 ポロブドゥールの最上階に鎮座する釈迦

も、忠告することも、褒めることもしない。なぜなら命令したり、忠告したり、褒めたりすれば、結局、欲望に取り込まれてしまうからだ。この思想が強調することは、冷静に自己を見つめよ、言い換えれば、事実を事実のままに受け止める科学的思考で自己自身を見つめよ、ということだと思ふ。

この思想は「幸福論 (kawruh beja)」とも呼ばれている。キ・アグンが本当に説きたかったことはいかにして「幸福」を得ることができるかということだった。人間の幸福は、自分のうちにある欲望をじつと見つめる「観察者」こそが自分自身であることを認識することで得られると説く。その「観察者」に生まれる静謐、安穩、安定こそが幸福であると説くのである。静謐、安穩、安定はジャワ社会の中心的価値であり、それはすでに拙著『アルースとカサル―現代ジャワ文明の構造と動態』（染谷：一九九三）で説いた。アルース (alus) というジャワ語は日本語では上品、洗練、優雅などと訳せる、多義性をもつ言葉である。反対は kasar という。下品、粗野などと訳される。私はこの「観察者」についてポロブドゥールの最上段に鎮座する釈迦像を思い浮かべる（図1 ポロブドゥールの釈迦）。

冷静に自己を見つめるという理性的態度の推奨は、この心学が生まれた一九二八年の社会状況を考えれば、非常に重要な態度で

あった。

混乱のジャワ社会

私は、ジャワ社会に合わせると七年ほど滞在したが、そこで印象深かったことの一つは規律 (disciplin, tertib) という言葉がしちこちで見かけ、また聞かされたことだった。これらの言葉がしばしば使われるということはジャワ社会がいかに混乱しているかをよく物語っている。ジャカルタのような大都会はもちろんだが、ジョグジャカルタでも急激に自家用車とバイクが増えているが、その運転ぶりはまさに無軌道そのものだった。スリや盗難や詐欺も日常茶飯事。私も一度、乗合バスでとなりに座っていた学生風の男に拘られた経験がある。バスが発車してから気づいたのだが、財布の中は小銭だったのが幸いだった。安全社会に慣れ切った日本人には怖いところだ。常にジャワの人々が警戒を怠らないのは驚きでもあった。「気をつけろ (awasi)」という言葉はしよっちゅう聞いた。冗談ではないかと思えるような魔術師まがいの泥棒の話もよく聞かされたものだった。煉瓦の壁を音も立てずに切り取り、侵入するといふのである。現代のそうした状況は植民地時代にはもっと酷かっただろう。

植民地時代は最上位にオランダ植民地政府が監督の目を光らせ

ていたが、地域は現地人特権層に行政が任されていた。しかし現地政府の統治能力は欠如し、地域の秩序は乱れていた。地域政府は植民地政府に懐柔されて骨抜きにされ、汚職にまみれていた。今日でも汚職は目に余るものがある。庶民の役人と警察官への不信感ほとんど文化になっている。役所に向いて許可をもらうのもまともには進まない。袖の下は当然のことなのだ。公務員になる場合も担当部署の役人に巨額の賄賂を払わなければならないというのはいよっちゅう聞かされた。常識なのだ。今日でも汚職は一向に減らない。スシロ・バンバン・ユドヨノ前大統領は汚職の撲滅を徹底的に進めた結果、幾分かの成果を上げたようだが、まだ後を絶たないと聞いている。一例として私が四〇年以上も交際してきた家族を挙げよう。この家族の次男は苦勞した挙句、幸運にも幹部養成の警察大学 (AKABRI) に入り、そこを出て出世したのは良いが、みるみるうちに隣家の土地を買い、豪邸を建てた。警察官の給料は決して高くないから豪邸を建てた資金がどこから出たのか、想像に難くない。この家族のことはよく知っている。熱心なムスリムであることも知っている。かつて経験した悲惨な苦勞も知っている。しかし汚職で豪邸を建てたのを知って私は失望した。そんな人ではなかったのに、と。

心学の関係者からは最近、裕福な人から心学を学びたいという

依頼がしばしばあると聞いた。汚職の摘発を恐れてどう対処したらよいかを知りたいのだという。汚職は今やインドネシア文化となってしまったとは随分前から言われてきた。この汚職に加えて町のあちこちに散らばるゴミを見るたびに思う、「やりたい放題」という公共性の喪失に失望の念を禁じえない。日本と比べて感じる大きな違いの一つである。

心学が幸福論であるならば

ジャワ人の人類学者マルバンゲン・ハルジョウイロゴが紹介しているように、この心学は広くジャワ社会に行き渡っている（マルバンゲン…一二五）。確かに、私がこの思想についてジャワの人々に語ると、聞いたことがあると答える人が多かった。その理由は後で述べる。

この思想が当時のジャワ社会に必要なものは、社会的混乱があるからであった。キ・アグンがしばしば例として挙げているのはギャンブルであり、夫婦関係の乱れなどであった。慢性的な貧困もあり、一攫千金を夢見てギャンブルに没頭する人が多かった。ギャンブルに狂って破産したために夫婦間の揉め事は日常茶飯事だったようだ。もちろん勝手気ままな男女関係も頻繁に起こっていた。現代でもまだ見られるが、理想の夫婦関係は「どこ

までも妻は夫に従うべし」という倫理に基づくものである。ジャワには「天国にも地獄にも（妻は夫に）従うべし」ということわざがある。もちろんこのことわざに対して異議を唱える教育程度の高い女性もいるが、都市の下層の人たちや農村の人たちにはそうした倫理に従っている人が多い。とくに多くの女性の考え方や行動を見ると、まだこのことわざが生きていると実感したものだ。例えば心学の理論的指導者であったプルワント氏の妻にもそうした考え方が見られたのである。プルワント氏はしばしば自宅で心学の集まりを開いていた。プルワント夫人は客に一見、喜んでお茶や菓子を出しているように見えた。だが、プルワント氏は無職であり、農業省の役人だった妻の収入で生活していたのだ。お茶を沸かしたり、芋を煮たりといった労力だけでなく、出費の問題もあり、彼女にとって集会は歓迎しなかったようだ。それをはっきり述べたのはプルワント氏が亡くなったあとだった。どれほど苦勞して夫を支えてきたかを語ったのである。彼女にも「天国にも地獄にも従うべし」の精神があった。プルワント氏は客観的、科学的に考え、自立的な考えを持つようしきりに説いていたが、妻にはそれを許さなかったようだ。心学が出た二〇世紀初頭のジャワは一部の特権層を除けば貧しかった。貧しさに起因する犯罪も多かった。心学はそうした状況

のなかで苦しむ庶民に対して心の安定を説いたのである。それ自体に問題はない。しかし心学が人間の幸福を追求する思想であるならば、幸福になるための身体的条件すなわち健康そのもの、そしてそのための安定した食糧をいかにして確保できるか、その方法を説かなかったのは問題だった。食糧問題は今日でも解決できないでいる。まして二〇世紀の初頭ともなれば、なおさらであった。キ・アグンがこうした食料問題と健康問題に触れなかったのは重大な欠点だと考える。

なぜジャワ心学は物質的問題ないし食糧問題に触れなかったのか？

ジャワ心学が物質的問題に触れなかった第一の理由は、ジャワという熱帯では食糧問題が起らないということが挙げられる。

インドネシアは赤道をはさんで北緯五度南緯一〇度の間に広がる。南北の幅はそれほどではないが、東西はサンフランシスコからニューヨークあるいはマドリッドからモスクワの距離に当たる広さをもっている。ジャワは南半球に属する熱帯にある。一年の半分が雨期で半分が乾期だが、雨がほとんど降らない乾期であっても山から流れてくる川の水が農業を可能にしている。全体に山がちなインドネシアは水で困る地域は後で紹介するグヌン・キドゥル地方など一部を除けばない。燦々と降り注ぐ陽光、高い温

度、潤沢な水、肥えた土地（肥えているのは火山が多いから）、これほど恵まれた大地は世界のどこを探しても滅多にあるものではない。人々が食べるということに困らない一つの理由だ。食べることと楽観的になったとしても当然だろう。私はジョグジャカルタに滞在している間、家の風通しのよいところに最低最高温度計をセットして気温を計ってみたが、一年中を通してほぼ二二℃から三二℃であった。このような気候条件であれば、主食であるコメには打ってつけである。もちろんコメ以外のトウモロコシ、サツマイモ、ジャガイモ、キャッサバ（ジャワでは *singkong* という）なども育つ。キャッサバは水が不足がちな地域で植えられる。乾燥に強い。他にタバコ、落花生、バナナ、ムリンジョ（葉や実などが食される）などが植えられる。宅地には換金用のヤシ、ナンカ（ジャックフルーツ）、バナナ、竹、スクン（パンの木）、サウオ、マンゴー、パイヤ、ランブタンなどが植えられる。

かつて私は水不足に悩む地域の農民たちを調査したことがあった。ジョグジャカルタ特別州のグヌン・キドゥル県である。農民はもっぱらキャッサバを栽培していたが、飲み水は政府が設置したタンクまで片道四キロを天秤棒に石油缶を下げて運んでいた。私はそうした地域に住む人々の難儀を思った。たとえ「住めば

都」とはいえ、灼熱の太陽のもと、延々と何キロも、それも登り降りの道を重い天秤棒を担いで運ぶのは重労働である。政府が進めた移住計画に応募してスマトラに移住したのも当然だった (Someya 1990: 4-20)。

いつもバナナなどが実り、稲作ができるのを見て、私は熱帯という地域が温帯や亜寒帯と比べていかに恵まれているかを実感したものだ。いわば自然が主役であるかのように、その分、人々の労力は小さくて済む。農業がほとんどできない冬がないというのは何といてもありがたい。反対に、温帯や亜寒帯では人間の労力が不可欠である。例えば亜寒帯の北海道では麦、トウモロコシ、ジャガイモ、稲などを作付けているが、五月頃から八月頃ないし九月頃までしかできない。その間、農家は休む暇もない。しかし九月も過ぎればもう冬支度、何も植えることができない。雪が降らない静岡の農家は北海道よりは恵まれている。夏には稲、冬にはレタス栽培などが出来る。もともと、レタス栽培も吹きすさぶ強い寒風のなかの農作業は厳しい。北海道よりも恵まれているがそうはいってもやはり熱帯には負ける。

おそらく熱帯のこうした恵み豊かな自然条件が自然への絶対的な信頼を生み、楽天性を生んでいたのであろう。逆に温帯や亜寒帯の人間は勤勉にならざるを得ない。その勤勉が工業化や商業化

には有利に働いた。しかし熱帯の農業で生きてきた人たちは勤勉を必要とする工業化や商業化には馴染まなかった。出遅れたのもっともである。最近、日系企業をはじめ外資系企業が数多くジャワにも進出し、たくさんのジャワ人を雇用しているが、彼／彼女らは日本人のようにきびきびと協目もふらず仕事に集中することは苦手のようなだ。

もちろん貧富の差を生む植民地主義や今日の土地所有形態などの社会的条件がそうした自然への信頼を崩す可能性もある。しかし相互に助け合うという精神がそれをカバーしている。確かに、農家の一部とくに富裕層は自立精神が強く、富裕層と貧困層の間には断絶があることも見逃せない。こうした階層の上下に伴う社会観の違いについては拙稿(柴谷一九九三三四二)を参照願いたい。

こうした自然的社会的条件が重なり、ジャワでは餓死という悲劇は聞いたことがないといわれている。ただ、苛酷な強制栽培制度のもとで飢餓が発生した事実があった(森一九八〇一〇〇)。豊かな人々が貧しい人たちに恵む行為はイスラームなどの宗教が後押ししていることもあり、盛んで、町の住民はしばしばやってくる物乞いに備えて常に小銭を用意しているところにそれを見ることが出来る。あるいはイスラームの祝祭に際して富裕層がヤギを

寄贈し、貧困層の人々にその肉を分け与えるという儀礼にもそれを見ることが出来る。

第二に考えられることは、第一のことに加えて、長い植民地支配の結果としての無力感と諦念が彼らの文化になってしまったことである。

植民地政府からの年金を拒否し、反抗したキ・アグンでも現実には力の対決に躊躇せざるを得なかった（染谷一九九七：二五四）。そこに無力感があった。果敢に戦いを挑むという気迫は感じられない。私が多くジャワ人を感じる特徴の一つがそれである。ジャワの人々は祖先伝来の土地に住みながらも、その土地は他者の支配下にあった。祖先から受け継いだ土地は他者の権利の下にあり、借地人に転落させられた人々の気持ちはどのようなものだったろうか。無力感と無念、さらに諦念さえにも取り憑かれてしまったのではないか。

彼らは自分の足で立ち、自分の頭で考える機会を奪われてきた。私はジャワのある村の古老が語ったことばを思い出す。彼は、「オランダ人に『お前たちは動物(具体的には農耕牛のこと)なのだ。ただ手と足を動かすしかできない動物なのだ。お前たちには考える力などないのだ』といわれ続けました。毎日のようにそういわれているとだんだん、本当に俺たちは能力がないのかも

しれないと思うようになるものです。俺たちは、オランダ人のようにいろいろ考えることはできない、根っから脳なしの人間なのだ、と思うようになりました」と言った。このようなオリエンタリズムの言葉はまだ影響力をもっているように思う。

人間ではなく動物なのだ、と押し付けられたところに生まれる無力感と諦念。オランダの愚民政策はそれに輪を掛けた。読み書きできるのはごく一部のエリートだけに許され、ほとんどの人々は文字を読むことも書くこともできないままに放置された。私が一九七七年から七九年に掛けて調査したジャワのある村（マルタニ村）では自分の名前すら書けない農民がたくさんいた。彼らは書類にサインするとき、拇印を押ししていた。文字を読み書きできなければ、当然ながら本も新聞も読めない（村には今でも新聞は配達されていない）。勢い、自分の頭を使って理詰めで考えることもできない。そうなれば、他人のいうことに左右される。とくに有力者の意見に動かされる。その有力者はオランダ植民地政府に懐柔され、無力化されていた。オランダ植民地政府に敢然と刃向ったキ・アグンのような人物はまれだった。

私は今のインドネシア社会もうわさがこだましている社会だと思っている。うわさは思考力を奪う。私がインドネシアに滞在中もしばしば根も葉もないうわさが世間を騒がせていた。人々は他

人がいうことを素直に聞くあまり、批判的に聞くことができな
い。批判できるのはエリートだけという社会だった。もつとも、
うっかり批判しようもすれば、警察に拘束されかねない。言論統
制が凄まじかったスハルト独裁体制ががんじがらめに人々を縛り
つけていたからである。戦前戦中の日本のようだった。

自分の意見がないから有力者に従う傾向は村の会議を見ていて
感じたものでもあった。意見を述べるのは二、三人の有力者だけ
で、他の人はただただ聞くだけ、終始無言だった。他方、ジョグ
ジャカルタ市のある町内会は全く様相が違って民主主義が育
っていると感じたものである。ジョグジャカルタはインドネシア
でもきつての文教都市で国立のガジャマダ大学をはじめたくさ
んの大学や短大、専門学校がある。私が調査した町内にも全国か
ら集まってきた学生たちが下宿し、町内会のメンバーとして迎え
られていた。彼らは活発に意見を述べていたのである。

私は町内会で活発に意見を述べていた学生たちに驚いたものだ
った。日本の学生とおよそ違っていたからである。自由にもか
いえる社会ではなかったが、彼らの発言には力がこもっていたか
ら町の長老たちは押され気味だった。おそらく学生たちは会議の
中で自らの存在感を自覚していたと思う。会議には市の役人も立
ち会い一部始終を聞いていた。もし危険思想を述べる者がいれ

ば、会議の後に尋問を受けるといった雰囲気だったが、学生たち
は用心しながら慎重に発言していたのが印象的だった。明るさ
にも重苦しさもあった。

ジャワ人の無力感と諦念に関連してここで述べておくべきこと
は、ジャワ語にもインドネシア語にも「頑張る」を意味する言葉
はあるが、口にすることはあまりないということである。「頑張
れ!」「頑張ります」を頻繁に使う日本人のように、この言葉を
耳にすることはあまりない。例えば子供の成績が向上することや
試験に成功するよう祈るときも(親が)「勉強がうまく進むとい
いね」とか、(子が)「もうすぐ試験があるんです。合格するよう
に祝福してください」というように、祈願の対象は(言外ではあ
るが)神であり、子供自身の努力を促す言葉は出なかった。日本
人がしばしば使う「頑張れ!」のような自力で困難を乗り越える
ことを促す言葉は聞かれない。

そうしたジャワ人とは反対に中国人やインド人やアラビア人そ
して一部のジャワ人は精力的である。私はジョグジャカルタに住
んでいる間、たくさん中国人と知り合い、交際した。インド人
やアラブ人はジョグジャカルタには少なかつたこともあり、あま
り知り合う機会はなかったが、目抜き通り(マリオボロ通り)に
大きな店を構え、衣料品などを販売していた彼らと話す機会はあ

った。私がよく交際した華人たちは多い。例えばケーキの販売から始めて次第にたくさんの商品を扱うスーパーマーケットを営するまでになったN氏（女性）がいる。彼女はやはり華人である検察官と結婚し三児を儲けた（これは彼女と親たちの戦略だと思う。夫が検察官であれば何らかの揉め事があっても有利に運ぶことができるからだ。そこで見られる公私混同は日常茶飯事である）。N氏夫妻の家の一部を借りて住んでいた私の家族はN氏一家の朝から晩までを見ることができた。一言でいえば凄まじい働きぶりということだった。事業が成功するのをもっともだと思っただけである。数年後にN氏一家を訪れて知ったのだが、すでに五、六軒のスーパーのほか、大きな文具店やバティック店、みやげ物店などさらに事業を拡大し、しかも大邸宅を構え、メルセデスなど高価な自家用車も数台持っていたことであつた。私が最初に知り合つた当時の一九七〇年代にはまだ幼稚園の園児だった子供たちも親とともに店を営する店主になっていた。愛想がいいこともあり、N氏はジョグジャカルタの名士の一人となつてた。

ジャワ人であつても華人の如く商売に成功した人もいる。材木店を営んでいるA氏も大々的に材木の販売に精を出していた。彼の妻は美容院を営んでいたが、なかなか評判がよく当時の大

統領（スハルト）夫人のお抱え美容師でもあつた。A氏一家に隣接した家を借りて住んでいた私たちは彼らの日常生活を目の当たりにしていた。彼らの生き方も忙しい毎日であつた。彼の兄も木材店を営み成功していた。バティックの製造販売を手掛けていたY氏夫妻やM氏夫妻などもジャワ人だったが、彼らは一般のジャワ人とは違い、ほとんど華人といつてもよい人たちだつた。

私が一九七七年から七九年に掛けて調査したマルタニ村でも華人のような行動様式をとる人がいた。この村を含む地域一帯で唯一の精米所を営んでいたSD氏は精米所の他に養豚、養鶏、雑穀商、大土地を所有した農業経営など多角経営を盛んに行つていた。私は彼の経営方針などを聞いたが、彼との会話で印象深かつたのは「頑張る」「努力」という言葉をなんども使つていたことである。「自分の精神を鍛える」というジャワ語すら出てきたのだつた。普通のジャワ人が使うことばではなかつたからとくに印象深く記憶している（染谷一九九三・三五五～三五六）。A氏やY氏、あるいはM氏などもSD氏と同じような人生を歩み、成功者となつたと思われる。なお、A氏兄弟を「彼らは中国人だ」とする人もいたが、彼らの系譜関係を調べた限りではジャワ人だつた。とはいへ、ジャワ人と華人の間には混血が相当の昔から進んでいたから果たして彼らが純粹なジャワ人であるとは断言できない。血

縁関係はともかく、思想的関わり合いは容易だから彼らが華人的発想を身に付けたとしても無理はないと思う。

マルタニ村の調査結果からこの村はジャワ伝統の思想を持つ人と近代的思想を持つ人が混在していて当時は後者が少数派だったが、やがて後者が増えるであろうと推定した（染谷一九九三：三五七）。その推定は間違っていないかと思う。近年、ジョグジャカルタもますます経済発展が進んでいるのがその証拠である。

このように見ると、ジョグジャカルタについていえば、ジャワ人は祖先から受け継いできた文化を生きたことができ、代々住んできた土地を耕し、住めるといふ意味で文化的かつ社会的存在ではあった。しかし自らの生き方を決められないという意味で政治的存在ではなかった。そして収奪につぐ収奪を強いられたという意味で経済的存在でもなかった。他方、華人やインド人、アラブ人たち外来人は経済活動に励み、収益を得てきたという意味で経済的存在ではあった。しかし政治的存在でもなかったし、「仮住まいの身」であり社会的存在でもなかった。とりわけ多い華人たちは生活難から広東、福建、潮州などの故郷を出てジャワに渡来した外来人であり、やがて故郷に錦を飾ることを夢見てひたすら経済活動に励んできた存在であった。彼らが頼りにできるのは金銭だけだったから必死に働くのも当然である。オランダ人は政治

的存在でかつ経済的存在ではあっても社会的存在ではなかった。オランダ人が住んでいたのは町の一角で今でも高級住宅地として知られる地域である（現在は裕福な華人とジャワ人が住んでいる）。

このような、現地人と「外来人」とオランダ人の関係はインドネシアのほぼ全体に見られたと考えられる。同時に文化的存在、政治的存在、経済的存在、社会的存在であった日本の日本人とは事情が大きく異なっていた。

第三に考えられることは現地政府の統治能力が不足してジャワ社会が混乱していたことが挙げられるが、それについてはすでに述べた通りである。

第四に考えられることは、ジャワの伝統思想がかなり精神主義的であったということである。もちろん、精神を肉体より上位に位置づける近代西洋思想の影響を受けたことも考えられるが、それよりも一般民衆にも影響を与えてきた伝統的なジャワ思想のほうが大きい。

私は多くのジャワ人からしつかりした精神をもつことの重要性を聞いた。たとえば、高校の教師をしていたある女性は親から「食は控えよ。眠りは短くせよ」と教えられたという（染谷一九九三：三四四）。また公務員のマルウォト氏は子どもに対して自己抑

制、欲望に耐える、平常心、順応心を教えていると言った（染谷一九九三…三四四）。先のSD氏とともにこのような精神主義はジャワ社会ではかなり一般的であるようだ。しばしば耳にするのは人間というのは目に見えるもの（Jair）と目に見えないもの（batin）からなるという考え方である。目に見えないものとは心である。ジャワの人たちは後者に重点を置いている。イスラーム思想の影響を見ることができる。

精神に重点を置くジャワ文化

悲惨な状況にある民衆がいかにして幸福な生活を送れるか、それに答えようとしたのが心学であった。彼が答として出したのは、簡単にいえば、冷静な理性の心を持って、というものであった。確かに、心が定まらず、不安定な生活をするのでは幸福とはいえない。だが、心の安定だけで幸福になれるのだろうか。やはり身体の安定つまり空腹がない、やまいに罹らないといった身体の安定状態も重要なはずである。

抗しがたい長い植民地支配下にあつては自己抑制的精神主義によつて慢性的な物資不足に耐える文化を創出したのではなからうか。そうした文化を優雅で上品な文化と価値づけたのではないかと思われる。そういう価値づけが下層の人たちにも浸透し、心学

をいとも簡単に受け入れる土壤を作ったと考えられる。

心学の基本的態度は「見ること」であつた。「見る」、あるいは「見守る」という態度は徹底して受動的であり、能動性は無縁となる。この受動性について、私はジャワ語文化の面から論証したが、その一部は『比較文明研究』一七号で述べた。心学の態度は、どのような状況であれ、与えられた状況を甘受する態度である。好ましい状況であれ、好ましくない状況であれ、それを受け入れる。好ましくない状況であれば、好ましいと思うところまで要求を引き下げる。そこでは好ましくない状況を変革しようとする努力はしない。どこまでも受動的である。

こうした態度が自然のなりゆきに任せる態度、退嬰的態度さらに苦痛から逃避する態度を取らせるとしても不思議ではない。先に紹介したマルウオト氏を訪れたある日、彼の弟子が期末試験を迎え頭痛に悩まされている学生の治療にあたっていた。頭痛に悩まされているのだから頭痛薬を飲んで痛みを和らげることができたはずだが、「神から借りた術」（マルウオト氏）で直すのだという。人間が作った薬に依らず、神の力に頼るといふこの治療も受動的態度といえよう。もつとも、ジャワには植物から抽出した伝統的薬（jamu）もあり、それを使うならば、自然に依存した治療法となる。

明治の文明開化以来、徹底して西洋文明を受け入れてきた日本人がますます能動的になり、人工的医薬品に依存しているのと対照的といえよう。もちろん医薬品だけでない。夏の野菜（例えばキュウリやトマトなど）を冬に栽培して販売するなどと同様で、人工性の極みといえる。住む家にしても自然の素材を使うよりも、あたかもガラス、鉄、アルミ、プラスチックなど人工物だけで出来ているかのような住居が増えている。そういう日本人から見ると、ジャワの人々は神や自然に依存する、いわば他者依存の人々であると思えるだろう。

神が満ちている国とモノが満ちている国

日本人がインドネシアに住み始めてまず持つ違和感の一つは、朝まだ暗いうちからラウドスピーカーで呼び掛けるアザンである。これは祈りの時間が来たことを告げるアラビア語の挨拶なのだが、一日五回流される。そうした習慣がない日本人にとっては安眠妨害だと文句の一つも言いたくなるどころだ。しかし慣れてくるとそういう気持ちは消え失せ、親しみすら感じるようになる。そして日本に帰ると無性に懐かしく思われる。人間の気持ちというものは不思議である。もちろん金曜日にはどのムスジッド（モスク）もたくさんのムスリム（男性のイスラム教徒）・ムスリ

マー（女性のイスラム教徒）が集まり、説教を聞き、祈る。他方、カトリックやプロテスタントの教会は日曜日になるとどこもいっぱい信者で溢れている。ジャワにはヒンドゥー教徒や仏教徒があまり多くないためにヒンドゥー寺院や仏教寺院はほとんど見かけない。いずれにせよ、（統計上は）すべての国民が何らかの信者であるからジョグジャカルタの町が宗教に溢れるのも当然だろう。ここで「統計上」といったのは、名目上の信者もいるからである。その数は少なくないと思われる。私が調査したマルタニ村を例にとれば、全人口のうち、「毎日五回の礼拝を行っているわけではない」と答えた人は七四・三%だった（柴谷一九九三：二三一）。つまり四人に三人が「統計上」ということになる。これがジャワ全体を表わしているとはいえないが、この数字から推定する限り、「統計上のイスラム教徒」はかなり多く存在すると思われる。しかしそういう多くの村人が宗教心に欠けると見られることは誤解を生む。彼らはワヤン（影絵劇）を好んでいるからである。ワヤンは古代インドの物語であるラーマーヤナとマハーバラタを影絵劇で演じるもので、その中にヒンドゥー教の教えがちりばめられているから彼らは知らず知らずのうちにヒンドゥー教徒になっていることになる。だとすれば、彼らはイスラム教徒というよりヒンドゥー教徒ということになる。それだけではない。

ジャワで演じられるマハーバラタはスーフィー・イスラームの要素（神は人間の内にあるという神観念）も取り入れており、その観点からすれば、彼らはイスラム教徒ということにもなる。なお、イスラム化したマハーバラタについては染谷二〇〇八を参照願いたい。

インドネシアは憲法の憲法といわれているパンチャシラ（建国五原則）を大事にしている。その最初に「唯一至高の神（Tuhan yang Maha Esa）」という文言が掲げられている。そしてすべての国民がイスラーム、カトリック、プロテスタント、ヒンドゥー教、仏教、儒教など政府公認宗教のいずれかに属さなければならぬとされている。したがってこれらの信者を合わせると一〇〇%になるわけだが、たとえば心学の理論的指導者であるハルソノ氏は「私はどの宗教にも属していない。身分証明書（KTP）にはイスラームとなっているが、それは役人が勝手に書きこんだだけのこと」と言い放った。「それは違法ではないんですか？」と訊いたら、「違法ではない。『国民はすべてがいずれかの宗教に属さなければならぬ』などと規定した法律なんかないのだから」と答えた。彼がイスラームはもちろんキリスト教やヒンドゥー教、また仏教についても知識が豊富なことを私は知っていた。それどころか、禅のついてもかなりの知識を持っていた。心学と共

鳴するものがあつたからだろう。ハルソノ氏のように自身の宗教観を明言する人はあまりいないだろう（もつとも、彼とて公然と明言しているとは思えないが）。しかし名目上はともかく実は無神論者であるとか、反宗教である人も決して少なくないと思われる。たとえば心学で立ち直ったと語ったマルジョ氏が語るところによれば、彼はキヤイ（イスラームの指導者）もカトリックの司祭も嫌いだという（染谷二〇〇八：六四、Someya 2001: 6-12）。彼は心学を知る前まではイスラームにもカトリックにも従った生き方をした。私の印象では彼はかなり熱心に教えを受け入れていたと思う。しかし心学の教えを知ってからというもの、キヤイや司祭は本当のことを教えない「詐欺師」だと判ったという。このように既成の宗教の権威に疑問を抱く人は少なからずいると思われる。

幸福論としての心学に欠けるもの

キ・アグンが人々の幸福を願ったことはすでに触れた。そこでは物質問題ないし食糧問題が欠落していることを指摘した。心学が「観察者」の側に力点を置いたところに問題がある。言い換えれば、「観察者」の対象とされた「欲望」が対象化されたところに問題があつた。「欲望」はあたかも第二義的位置に置かれてし

まったのである。

人間の欲望というものは確かに厄介である。だが欲望があるからこそ、人間という動物は生きているのであり、その事実を見れば、欲望を第二義的位置に置くことは不当であろう。観察者と同じ高さの位置に置いて見るべきではなからうか。

自然災害であれ、植民地支配のような社会的災害であれ、それら乗り越えて生きることが最優先にするならば、当然ながら欲望の増進を奨励しなければならない。困難を乗り越えて生きるということを奨励しなければならない。キ・アグンはその行き過ぎを警戒したのであろう。しかしそれが欲望の縮小を奨励するという逆作用を引き起こしてはいないだろうか。彼は *senat* (ヤシの葉で包んだものを止める(ヤシの葉の葉脈で作った))、ピンの意、ただしキ・アグンがなぜこの単語に物欲などの意味をもたせたのか、は不明)、*derajat* (地位)、*kramat* (名誉) という言葉を使い、それぞれ物欲ないし快樂欲 (*senat*)、權威欲 (*derajat*)、権力欲 (*kramat*) を説明したが、民衆にとって權威欲とか権力欲などというものはほとんど意味がなかったのではないだろうか。食欲とか性欲は *senat* に入るとしても、表現したいという「表現欲」や他者と繋がっていたい「繋がり欲」なども考えなければならぬのではないか、と思う。また、安心を求める気持ちも欲

と考えるならば、果たして「観察者」と変わらないことになる。とすれば、「欲望」と「観察者」という分け方に問題があるという疑問も出てくるが、ここではこれ以上に問題化しないでおこう。

「欲望」を脇に置き、「観察者」に重点を置いた思想からは人間の能動性を評価する考え方は出てこない。人間は生物として生体を維持し、活力を身に付けなければ生きていけない。まして常に移動しなければ生きて行くことができない動物となると尚更である。心学思想は、平和、安穩を志向するだけで、能動性、未知なる領域に果敢に踏み入ろうとする進取の気象も生まない。成長、発展を後押しする気象を生まない。人間が生物であり、動物であるならば、心学が説くところだけでは不十分ではないかと思う。

真の生き方を求める気風

マルジョ氏が懸命に真の生き方を模索してきたことは彼の語りにも明らかである。マルジョ氏はギャンブルに狂って何度も挫折した後、今では田舎の人通りの多い道の脇で竹材を売っている。妻も息子も一緒になって生計を立てていた。収入は決して多いとはいえない。しかし彼らにみなぎる活力には確かなものがあった。

ジヨグジャカルタは一般庶民のなかにも彼のような、精神を大事にする一種独特な気風がある。心学がそのような気風を追い風にしてマルジョ氏のような人物を育て上げていることにも注視しなければならぬ。だとすると、心学が欲望を促進しない、そして受動的で退嬰的であるという指摘は再考しなければならぬ。

とはいえ、注目しなければならぬことは、マルジョ氏がかつてイスラームにもカトリックに傾倒したものの、拳句の果てにキヤイにも司祭にも批判的になったことである。彼はイスラームにもカトリックにも真の生き方を求めた。その熱意と積極性はむしろ心学を知る前から持っていた。つまり心学が教えたものではないということである。彼の熱意と積極性は彼自身もっていた気質だろう。私が知った彼以外の心学研修者から受けた印象はやはり受動的で退嬰的というものであった。

真の生き方を求める気風は現代の日本にあるだろうか。私はジヨグジャカルタの人たちとは反対に、モノを求めることに汲々とする気風のほうが強いのではないかと思っている。心学の観点からすれば、欲望のほうに偏っている生き方、気風が強いのではないか、ということである。かつては日本にもジヨグジャカルタの人たちと同じような気風が流れていたにもかかわらず、モノの獲

得に汲々とし、まるであの気風はどこかに飛んで行ってしまったようだ。

日本は七〇年前にかつて味わったことのない悲惨を経験した。自業自得の結果だったとはいえ、前代未聞の悲劇だった。東京をはじめ全国の都市が焼け尽くされ、着る物、食べる物、住む家にも事欠いた生活を送ったものだった。何もないという状況はトラウマになった。その悲劇から何としてでも抜け出したいと必死に頑張った。それが日本人の心に深く焼きついてしまったようだ。考えてみれば、石炭にせよ、石油・天然ガスにせよ、エネルギー資源がほとんどを自前で調達できない無資源国家ならばなおさらである。モノ不足は恐怖となった。

それに比べるとインドネシアはエネルギー資源のほとんどを自前で調達できた（ただし最近事情が変わってきているが）。国土面積も日本の五倍、人口も日本の倍であり、銅、錫、ニッケル、ボーキサイト、など鉱物資源も豊富。まして食べる物も事欠かないならばモノの獲得に汲々とする必要はない。もちろんこうした物的豊富さに「甘えて」（ジャワ語やインドネシア語には「甘え」にあたる言葉がある）日本人のように勤勉ではないことを戒める人もいた。すでに述べたように自然条件は多くの恵みをもたらしているから甘えるのももつと私には思

のだが。

とはいえ、日本人もジャワ人のように自分を見つめ、自分が真の生き方からどれほど外れていないか、自省する必要があるのではないか、と思う。

現代文明を生きる日本人にとって必要なもの、それはゆとりのある心ではないかと思う。常に何かに追われて、ゆとりがない。なすべき自分の仕事だけに心を奪われ、それが永遠に続く。何か大事なことを忘れたままで。私はそういう生き方が人間の生き方だとは思わない。自然のリズムにそって生きる。それが大事ではないか、と思う。

私は若い時、朝八時仕事開始、昼〇時休み、一時開始、午後五時終了、という仕事についたことがあった。二年間辛抱した。しかし馴染めなかった。まるで機械ではないか、俺は機械じゃない、人間だ、と叫んで辞めた。そしてもっと自由な仕事を探した。

つらつら思うに、そんな考え方は我がままで、身の程知らぬ贅沢だ、と思う。現代文明は機械になるのが最も正しい生き方なのだ、と思う。「いや、違う」とまた心のなかで叫ぶ声が聞こえる。果たしてどちらが正しいのだろうか。

注

(1) ジョグジャカルタの映像記録については「NHKスペシャル アジア古都物語 第三集 王と民が支える平和の都」インドネシア ジョグジャカルタ」が参考になる。なお、この番組は「NHKスペシャル アジア古都物語 ジョグジャカルタ 支え合う王と民」、NHK「アジア古都物語」プロジェクト、日本放送出版協会、二〇〇二、として出版された。

なお、この作品の制作にあたっては私の意見を参考にしている。また、巻末に「民主主義国家のなかの『王国』」としてジョグジャカルタを含むジャワ社会と心学についても短く紹介した。参考にしていたければ幸いである。

(2) フィールドワークに先立ち、ジョグジャカルタを概括的に説明し、トピックの選定は相談の上学生に任せた。宗教、環境問題、時間観、現地人と華人の関係、多文化主義、大地震災害、ストリートチルドレン、ドウタン（呪術師）、小規模商店などさまざまであった。いずれも日本の現状を背景に置いて考えたものだった。報告書の送付先は、世話になったホームステイの家族、ガジャーマダ大学長、社会科学部長、文化文学部長、文部省大臣、LIPII（インドネシア科学庁）長官、ジョグジャカルタ環境庁など。

(3) 「わが心の旅 ブンガワン・ソロー秘められたメッセージ」NHK BS 一〇九七年三月一日放映

文献

マルバンゲン・ハルジョウイロゴ（染谷臣道・宮崎恒二訳）『ジャワ人の思考様式』めこん、一九九二

- ムルタトゥーリ(ダウエス・デッケル)(佐藤弘幸訳)『マックス・ハーフェラー』めこん、二〇〇三
- 森弘之「インドネシア農業社会の特質」、和田久徳・森弘之・鈴木恒之『東南アジア現代史Ⅰ』山川出版社、昭和五二年(一九七七)
- 佐藤弘幸「訳者あとがき」、ムルタトゥーリ(ダウエス・デッケル)(佐藤弘幸訳)『マックス・ハーフェラー』めこん、二〇〇三
- 染谷臣道『アールスとカサール—現代ジャワ文明の構造と動態』第一書房、一九九三
- 染谷臣道「アールスとカサール—ジャワ社会の差異化と一体化」、清水昭俊(編)『洗練と粗野—社会を律する価値』東京：東京大学出版会、一九九五 a
- 染谷臣道「絶対依囑・勇気・前進のための戦い—あるジャワ人ロームシヤの生涯—」、『東南アジア研究』京都大学東南アジア研究センター、三四卷一号、一九九五 b
- 染谷臣道「ジャワにおける植民地主義と文化的抵抗—キ・アタン・スリ ヨムンタラムの思想と行動に見る—」、山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化—人類学のパススペクティヴ』新曜社、一九九七
- 染谷臣道「ジャワ心学の比較文明的考察」、『比較文明研究』第一二号、麗澤大学比較文化研究センター、二〇〇八
- 染谷臣道「日本語とインドネシア語に見る「神の視点」と「虫の視点」を併せもつ言語文化の大いなる可能性について」、『比較文明研究』第一七号、二〇一一
- 吉永正春『九州のキリシタン大名』海鳥社、二〇〇四
- Someya Yoshinichi, Transmigration, Transcendence and Transformation of a Javanese Village in Southern Sumatra, Yoshinichi Someya

- and Makoto Ito eds. *The Formation of Life World among Transmigrants in Indonesia*, Department of Social Anthropology, Tokyo Metropolitan University, 1990
- Someya Yoshinichi, How Did the People Get Happiness through Learning the Philosophy of Ki Ageng Suryomentaram? Someya Yoshinichi ed. *Psychosomatic Responses to Modernization and Invention of Cultures in Insular Southeast Asia*, 2001
- Someya Yoshinichi ed. *Reports of Anthropological Field Training in Jogjakarta 2003*, Division of Social Sciences, International Christian University, Tokyo, 2004
- Someya Yoshinichi ed. *Reports of Anthropological Field Training in Jogjakarta 2004*, Division of International Studies, International Christian University, Tokyo, 2005
- Someya Yoshinichi ed. *Reports of Anthropological Field Training in Jogjakarta 2006*, Division of Social Sciences, International Christian University, Tokyo, 2007
- Yoshinichi Someya Cultural Adaptation of Javanese Transmigrants in Sabah, Malaysia. Masaru Miyamoto & Patricia Regis eds. *Cultural Adaptation in Borneo*, Department of Sabah Museum, Kota Kinabaru, 2002